

33年の時を隔て札幌の地で、
砂澤ビッキの作品が生む森厳な空間のなか、
能藤玲子が“みたび”舞う。

女の生き方をテーマとしていた能藤玲子が
新たに“自然との対話”を求め、
「風に聴く」と題した公演を行ったのは、
1986年12月のこと。

そのとき舞台美術として使われたのが、
当時、同じく“風”をテーマに自然を見つめていた
砂澤ビッキの代表作
「四つの風B」(後に「風に聴く」と改題)であった。



その後、神奈川県立近代美術館葉山の
砂澤ビッキ展会場での
ダンスパフォーマンス(2017年5月)を経て、

能藤玲子創作舞踊研究所開所60年、
砂澤ビッキ没後30年となる今年、
2人の表現が“みたびまみえ”、響き合う。

能藤玲子
伊藤有紀
伊藤千春
伊藤葉子
稻村泰江
五十嵐里香
東佐由理
演出
（能藤玲子創作舞踊団）

風 に 聴 く

能藤玲子 NOTO, Reiko

1931年網走市生まれ。6歳から9年間日舞藤間流に入門。1949年網走高女卒、網走市第2中学教員。1951年現代舞踊家・邦正美氏に師事。1959年札幌に創作舞踊研究所を開所。88歳の現在まで札幌で定期公演33回の他、東京などで新作を次々発表。芸術祭優秀賞、札幌市民芸術賞、現代舞踊フェスティバル優秀賞、北海道文化賞、松山バレエ団芸術賞、江口隆哉賞など受賞多数。海外公演もニューヨーク、ギリシャ、パリ、モスクワなど多数。



砂澤ビッキ SUNAZAWA, Bikky

1931年、旭川生まれ。1952年、阿寒湖畔に移る。その後、鎌倉にて瀧澤龍彦らと交友するとともに、モダンアート協会展を中心に作品を発表。1959年に旭川に戻り、1967年に札幌にアトリエを構える。1978年末から音威子府村篠島の小学校廃校をアトリエとし、豊かな木材資源をもとに、ダイナミックな造形の大作を制作。1983年10月から3ヶ月間、カナダのブリティッシュ・コロンビア州に滞在。1989年1月、57歳で逝去。



撮影 | 井上浩二

Introduction

2019.10.18 - 19

「風に聴く—みたびまみえる—」公演に寄せて 札幌文化芸術交流センター SCARTS プログラムディレクター 吉崎元章

舞踊と彫刻とがこれまでに響き合うものなのか。一昨年に神奈川近代美術館葉山での公演を観たときの衝撃が忘れられない。砂澤ビッキ展の会場内で、木彫の大作を縫うように行われたダンスパフォーマンス——。ダンサー6人が時に静かに時に激しく吹き荒れる風の化身となり、能藤玲子が四季の変化を司る精霊や神のように、ゆっくりとしかし全身にエネルギーを充満させて作品の間を移動しながら静かに舞う。それは、砂澤ビッキの作品のもう世界観と見事なまでに共鳴し、能藤の醸す王者の風格は、砂澤のそれと重なり合うものでもあった。

能藤玲子が、砂澤ビッキの彫刻を舞台美術に用いて「風に聴く」を初演したのは、1986年12月のことである。砂澤にとって、「風」は晩年の重要なテーマであった。それは、四季の象徴であり、人間にとって安らぎにも脅威にもなる存在として、正に自然そのものととらえていた。奇しくも同じ時期に「風」と向き合っていた二人の表現が融合した舞台であったのだ。

砂澤ビッキの日記には、すでにその10年以上前の1975年7月に、「静の彫刻と動の舞踏を合成による展開をできぬものか」と能藤と会談したことが記されている。長年の夢が叶った公演に感動した砂澤は、その晩寝ずに長い障子紙に延々と描いたドローイングを、翌朝早く能藤のもとに持参したという。その共振のほどは、それまで「四つの風B」と称していた作品名を、後に公演タイトルと同じに改題していることからもうかがえよう。

このたび能藤玲子が私たちの提案に応え、彫刻《風に聴く》とかかわる新作に“みたび”挑むことになった。同じ年に生まれ、40歳代から知遇を得ていたという二人の表現が、札幌においては実に33年ぶりに“まみえる”的である。

舞台と客席が近い会場で、能藤の渾身の新作を間近に観ることができる貴重な機会である。“空間形成としてのダンス”を探求する能藤の現代舞踊と、舞台上に配された砂澤ビッキの彫刻がつくりだす立体造形としての空間と気配。それらが奏でる緊張感に満ちた時空を多くの人に体感していただきたい。